

【はじめに】ヨブ記は難解とされています。そこで、■ヨブは苦難に遭うことによって<贖う方>(19:25, 26)、そして<主>を信仰の目で<見た>(42:5, 6)こと。(それを今回の説教題と副題に。)■ヨブが<主(ヤーウエ)>(31回記載)との「恵みの契約」で、<主のしもべ>(ヨブ1:8a, 2:3a, 42:7b)とされていたこと。■<義人は信仰によって生きる>(ロマ1:17他)ことがヨブに、そして読者に求められていることを、留意しましょう。

【ヨブ記が書かれた経緯】■ヨブ記は、古代オリエントにあった応報論の叙事詩の間違いを正すため、実話に基づく“叙事詩劇”。「叙事詩(じょじし)とは、物事、出来事を記述する形の韻文で、ある程度の長さを持つ。一般的には民族の英雄や神話、民族の歴史を語り伝える。」(ウイキペディアより)■ヨブは主(ヘブル語でヤーウエ。新改訳旧約聖書は太字で主と表記。)との「恵みの契約」で結ばれた実在の人物。(F・アンダーソン「ヨブ記」『ティンダル聖書注解』いのちのことば社2014年と、安田吉三郎「ヨブ記」『新聖書注解旧約3』いのちのことば社1975年に詳しく解説)【ヨブ記の梗概】■ヨブ記は、1, 2章のプロローグ(序章)と、46章7節以下のエピローグ(終章)が散文(通常の記事)で、3章から42章6節までが詩文。主とサタンのほかにも、おもな登場人物は、ヨブ、3人の友(エリファズ、ビルダデ、ツオフアル)。議論が膠着状態に陥り、エリフが登場。そして主の御声。終章は3人の友のために祈るヨブ。結びはヨブの繁栄の回復。

【ヨブ記の頂点(クライマックス)と結論】頂点は16-19章、結論は42章1-6節。



■ヨブ記は“富士山型”で16-19章が頭頂部。
■霊性のアップダウンを繰り返し、山頂から、義人の高ぶりという“奈落の底”へ。
■42章10節以下のヨブの繁栄の回復は“逆さ富士”。すなわちハッピーエンドがヨブ記が伝えたい中心メッセージではないこと。
(北森嘉蔵著『自乗された神』日本之薔薇出版社1981年87頁)【注】この北森嘉蔵の解説は分かり易いので紹介しましたが、この本は哲学的用語が多くて初心者には難解。

【ヨブ記1章の講解】■1. ヨブの紹介(1:1-5) (1)誠実で直ぐな心(1:1a) (2)神を恐れる人(1:1b) 知恵文学の基本。(3)多くの財産、家族の麗しい交わり、社会的名声、礼拝の生活(1:2-5)。■2. 主とサタンの論争(1:6-12)【注】この箇所がヨブの苦難の原因、友人たちとの議論のテーマ。(1)神の子ら(天使たち)の会議 主の“恵みの契約”に与っている<わたしのしもべヨブ>(1:8a)をサタンが訴える。「霊が肉を支えているのではなく、肉が霊を支えている」のだと。(浅野順一『ヨブ記』岩波新書1965年21頁) (2)ヨブの試練の意味 <ヨブに与えられた試練は、この「わたし(主)のしもべ」に与えられた試練である>(清水武夫「ヨブ記」『新聖書講解シリーズ(旧約10)』いのちのことば社、1989年29頁) (3)サタンの立場 (4)ヨブに対するサタンの評価 ヨブも御利益信仰にすぎぬと(9節)。(5)ヨブの試練の性格 サタンの真の敵は主。(上記I-1に記したように)主とサタンの会話を事前にヨブに知らされると、ヨブは褒美を期待して試練に耐えたと誤解さ

れるゆえ (2:4)、苦しむヨブの問いかけに主は沈黙するしかない。<神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。> (ロマ 8:28) **(6)サタン**の提案 ヨブに第1回、第2回の試練に遭わせた目的は、サタンの宗教観や道徳観を立証するため。但し、主の許容内で。 ■ **3. 第一の試練(1:13-22)** (1) **4つの災い** (1:13-19) ①シエバ人による略奪。②神の火が下る天災。③3組のカルデア人の襲撃。④突風で、七人の息子、三人の娘たちを失う。(これらは同時に起こったため、ヨブは対応のすべなし。)(2) **ヨブの反応(1:20-22)** この1:20-22は、サタンによる第一の試練は失敗したことを意味する。 ①悲嘆の極みにおいて (1:20a)、主への信仰告白と礼拝。<私は裸で母の胎から出て来た。また、裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな> (1:21b) **【解説】** ①「サタンに奪われた」と言っていないのは、主の許しなくしては何事も起こりえないと信じるゆえ。(キリスト者は運命論を信じない。)元々自分は<裸で母の胎から出て来た>のだから、<裸でかしこに帰>るのは当然と告白して、ヨブは主を礼拝した (1:20b-22)。(2章から登場する3人の友は、終始「主」という言葉を使っていない。) ②主のしもべが一切のものを失っても、為しうる最善、最高の行為は、主を礼拝すること。(ちなみに、キリスト教葬式の一義的目的は礼拝。そして御遺族へのお慰め。さらに自分自身の生き方の吟味。) ③このことは第一の試練(1:13-22)におけるサタンの目的(すなわち、ヨブの信仰は“ご利益信仰”であるとの主張が立証されなかったばかりか、ヨブは悲嘆の真ただ中で主を礼拝して、主である神に栄光を帰した。 **【注】**全財産を失い、愛する者たちの死に臨んでも、悲しむべきではないと、教えているのではありません。神の御子、主イエスは、ラザロが葬られた墓に向かう途中、<イエスは涙を流された> (ヨハ 11:34) ように、私たちの悲しみにも寄り添って下さる御方です。

【“日本のヨブ”と呼ばれた内村鑑三】 (1861年/万延2年-1930年/昭和5年)。1884年妻タケに離別され、1891年、明治天皇の御璽(ぎょじ)がある『教育勅語』に最敬礼せぬ第一高等中学校不敬事件で職場を追われ(名目上は依願退職)、マスコミや国民から国賊と非難され、(インフルエンザ)に倒れて生死をさまよい、(2度目に結婚した愛妻)加寿子が2年後に病死。加寿子とのあいだに生まれた長女ルツ子も1912年18歳で病死。実母の葬式で挨拶の途中で実弟から叱責される等々(内村鑑三著『ヨブ記』(聖書注解全集第4巻)教文館、1976年、250頁)。のちにヨブ記の連続講演会において、「ヨブ記の発端は一章、二章にして、十九章がその絶頂たり、それより下りて四十二章を以て終尾となす。しかしこの四つの章(八尋注:1, 2, 19, 42章)を読みしのみにては足らず、その間に挟まる各章を読むは、あたかも昇路及び降路において金銀宝玉を拾うが如くである。故に四十二章全部を心に留めねばならぬのである。」と語る。(内村鑑三著『ヨブ記講演』岩波文庫、2014年7頁)

【ヨブ記1章の学び(前半)を終えるにあたり】 全てのキリスト者がヨブのような試練に遭うのではありません。しかし、イエス・キリストを主と信じるキリスト者を(ロマ 10:9, 10他)サタンは必ず攻撃します(ルカ 22:31, 32他)。この霊的戦いから免れるキリスト者は一人もいません。

1. (ヨブと同じく、私たちキリスト者は)主イエスにある「新しい契約」(ルカ 22:30他)に与っている恵みを覚え、主イエスに在る御父を礼拝し、感謝を表わしましょう。(『新しい契約』は次に)
2. 自己の無力さを認め、「主の祈り」における6番目の祈願、<私たちが試みにあわせないうで、悪からお救いください> (マタイ 6:13)と、遡って、いつも祈りましょう。
3. 霊的戦いに目を覚まして、如何なる苦難に遭おうとも、<主のしもべ>としてを信じ続けましょう。(ヤコブ 5:11) 以上